

「戦争」について、私が初めて意識したのは、小学5年生のとき。仲が良かった近所の家族と広島へ旅行をすることになり、その子の父親に「戦争」や「原子爆弾」について調べてくように言われた。だから私は図書館に行き、本の検索機に「ヒロシマ原子爆弾」と入力した。すると、私が想像していた以上の多くの本や資料がヒットした。その中から、何冊か気になったものを借り、読んでみることにした。家に帰るまで、私は旅行のことを頭に思い浮かべながらワクワクした気持ちだった。しかし、家に着いて本を開いたとき目に飛びこんできた写真に言葉を失った。屋根や壁が原爆によってなくなり、焼け野原が一面に広がっていたのだ。それから何回かページをめくると1つの建物が現れてきた。天井がなく、鉄骨がむきだしになっていたが、なんとか建造物の姿を残していた。それは「原爆ドーム」というらしい。元々は人々が多く行き交い、近くの川では水泳の授業を行っていたようだ。他の本や資料も読んで私は旅行の準備を進めていった。このときは、楽しみな気持ちというよりはむしろ、戦争について学ばなければいけないという一種の使命感があったように思う。「今から私が見に行くのは、昔現実で起こったことなんだ」広島に向かう電車の中で恐ろしい現実と向き合う覚悟を決めた。広島に到着するとまず、原爆資料館と平和記念公園に行った。資料館には、原爆の影響で溶けたり、形が変わってしまった日用品やボロボロの衣服、当時の映像や写真があちらこちらに展示されていた。顔や体に火傷を負った子どもの写真や絶望して、ただ立ちつくしている人の写真など、正直見るに堪えないものもあった。その中でも、特に私の脳裏に焼きついているのは、当時の状況を再現した展示物だった。人々の目玉は熱により溶け、胸の前でぶら下がり、火傷でただれた両腕を前に伸ばしながら歩く様子は、まさにゾンビのようだった。

うめき声もしていた気がする。小学生だった私は、自分の前に広がる光景にただ愕然としていた。ひたすら怖くて仕方がなかった。

その後も、色々見て回ったのだろうが、あまりよく覚えていない。

ただ、平和記念公園の記念碑の前で手を合わせたとき、「このようなことは二度と起こしてはいけない」そう強く思った。また、私は戦時の状況を伝承している方の話を聞いた。家族と離ればなれになる悲しさや仲間を失う辛さ、次は自分かもしれない恐怖など、その気持ちはきっと、私たちの想像をはるかに超えるものだろう。

原爆の放射能を浴びた被爆者やその子どもたちは、他の地域の人に受け入れてもらえない、嫌がらせをされるなど辛い経験もしたようだ。

このときから、「戦争」について知りたいと思うようになり、それに関連した本やアニメを沢山みた。沖縄のひめゆりの塔や長崎の資料館にも行き、リアルな状況も目のあたりにした。そのときは、広島で受けた衝撃があり、心の準備を十分にしていた為、しっかり記憶に刻みながら見て回ることができた。また、ひめゆりの塔や資料館には日本人だけでなく、海外からの観光客も沢山訪れていたことに驚いた。と同時に興味を持ってくれていることが嬉しかった。1人でも多くの人に響くようにと願った。

戦争は私たちから日常を奪い、目の前に絶望をつきつけてくる。さらに核兵器は目には見えない放射能を発生し、体の内側からむしばんでいく。このような兵器は世界に必要なのか。存在させなければいけないのか。日本は世界で唯一の被爆国であり、その脅威を直に感じているはずである。戦争はもちろん、核兵器は今後二度と使われてはならない。広島や長崎に悲劇をもたらした核兵器はこの世に必要な。